

## 學者が忘れてゐる星座 (2)

Forgotten Constellations.

山本 一 清 *Issei Yamamoto.*

### Mons Maenalus メナルス山

この星座は、初夏の頭上に見える牧夫星座の南部にあつて、恰も此の牧夫が山の頂に登りつめたやうな姿に出来てゐる。しかし、このあたりの星は皆、微光で、四等以上のものは無い。従つて、むしろ之は牧夫座の一部を考へる方が宜く、獨立したものとしては、見にくい。メナルス山はギリシヤのモレヤ半島の中央アルカデヤ州に聳へる山の古名で、今はアパノクライバ山と呼ぶ。昔の神話に關連して有名な山である。豪勇ヘルクレスが數々の武功をたてた譚など、衆知のことである。

### Musca Borealis 北蠅

羊の星座の東北部にある33番、35番、39番、41番の諸星を主とする星の群で、第17世紀のバルチウスが作つたものといふ言ひ傳へであるが、ウゾ1は之をハブレヒトの作と主張してゐる。何故この星座が“蠅”と呼ばれるのか、其の理由は不明であるが、とにかく、三角座とプレヤデス群との中間の淋しい天空を占めて、比較的に見易い位置にある。ちようど之れは支那の28宿中の“胃宿”に當つてゐる。第十八世紀末までの諸家の星圖には現はれてゐたが、アルゲラング以後の十九世紀の星圖には記されてゐない。フランスでは、第十七世紀のロワイエが此の位置に“百合の花”といふ星座を作つた。いかにも小さく可愛い百合の花が咲いてゐるやうに星の配列に現はれてゐて、良い名であるが、他の星圖には採用されてゐない。

### Noctua 梟

初夏の南天に見えるヒドラ座の尾端にある54番星から58番星あたりと、天秤座の西南部の若干の微光星とから成るもので、誰が作つたものか、傳へられてゐない。星が皆、微光なので、眞の暗夜でなければ見えない。“梟”といふ名はふさはしい名である。この位置に、ルモニエは“鸚”といふ星座を作つた。ことがある。詳しくは、Turdus Solitarius を見られよ。

### Officina Typographica 印刷室

第十九世紀の初頭、ドイツの天文學者ポ1デが、近世文化の原動力たる印刷器械を記念するために作つた星座で、冬の南天の大犬星座のシリウス星の東方、むしろ艦座の北端で、赤緯 $-10^{\circ}$ から $-20^{\circ}$ までの間に含まれてゐる天の河

の一部である。星は皆5等以下の微星で、数は多い。一角獣座には侵入してゐない。ちよつと纏つた天空である。餘り多くの天文家には用ゐられないけれど、イタリヤのセキ師は1878年の自著星圖の中に之を記してゐる。

#### Psalterium Georgii ジョージ王の琴

第18世紀の末、1781年に、マキシミリヤン・ヘル僧正が“牛”と“エリダン”の兩星座の間に作つたもので、ジョージ王に献上したハープ琴である。エリダンの河のオミ星から、17, 24, 32, 35番等の諸星を含んでゐるが、星の配列は、散漫で、まとまりに欠けてゐる。(天界94號口繪寫真中に此の星座が畫かれてある。)

第二オミ星は有名な近距離の三重星で、光度は4.5等と9等と11等とから成り、固有運動は毎年東方へ4"、太陽からの距離は約16光年である。又、その9等の“B星”は白色矮星として、ひろく知られてゐる。

#### Quadrans Muralis 壁面象限儀

牧夫座とヘルクレス座と龍座とにまたがり、大部分は龍座のテ星とイ星との南部一帯にわたつてゐる。廣さは相當なものであるが、星の光度が弱くて、殆んど皆5~6等級の無名星ばかりである。第十八世紀の末、ラランドがミシユルと共に南アフリカへ觀測に行つた記念として、其の時使用した壁面四分儀の星座を此所に作つたのであつて、1795年出版の“フランス天文誌”中に記載した。アルゲランダ以來の諸家は此の星座を認めないけれど、毎年一月3—4日頃、この星座の一部(赤經 $15^{\text{h}}20^{\text{m}}$ 、赤緯 $+53^{\circ}$ )から有名な流星群が飛ぶのが、“四分儀座流星群”として知られてゐる。

壁面四分儀とは、第十八世紀以前の天文家が、星の赤經赤緯を觀測するために用ゐた器械であるが、後、この器械は改良されて壁面環となり、第十九世紀には更に其れが子午環となつて、益々重要なものとなつたのである。

#### Robur Carolinum チャールス王の樫

第十七世紀の中頃、英國の革命戰の時、チャールス二世王は、クロムエルの軍と戦つて、ウースタの戰に敗れ、1651年九月3日の日、24時間、一本の樫の樹の蔭にかくれて、難を免れたことがある。天文家ハリは此の事を記念するため、1679年に此の星座を作つた。王は之がため、ハリにオクスフォード大學から名譽學位を贈つたといふ。この星座は“アルゴ船”の星座の東、“センチウル”座の西に當り、その境界上を、南北に立つてゐる形であつて、高さ $30^{\circ}$ に及んでゐる。アルゴ船のオ1星以南に根があり、それからテ、エ1、ム等の星々の線に沿つて、亭々と聳へてゐるが、しかし、一帯に南方の天であるから、我が國の内地からも、毎年冬の末に其の頂部が少し見えるだけであつて、英國からは全く見えなかつたであらう。ハリは、この星座の南端にある二等星を

$\alpha$  Roburis (座座ア星) と呼んだが、後に之は  $\beta$  星と呼び換へられて龍骨座に入れられた。

### Sceptrum 王笏

第十七世紀、ヘベリウスが“白鳥座”と“アンドロメダ座”との間に“蜥蜴座”を作つた以前に、フランスのロワイエはルイ第十四世王のために“王笏”と呼ぶ星座を作つた。位置はアンドロメダ座の北西部で、オミ星、イ星、カ星、ラ星及び3番星、7番星等を含み、ひろさは東西も南北も共に $10^\circ$ ぐらゐ、四等級の星を5ヶも含んで、可なりよく目立つ星座である。

ところが、之れは、第十八世紀の末になつて、ドイツの天文家ボーデが、此の星座を取り消し、其の代りに“フレデリキ大王”といふ新星座を置いた。(その條を見られよ。)こうして、ドイツとフランスとは、天上に於いても、領土の奪ひ合ひをしてゐるのである。

### Sceptrum Brandenburgicum ブランデンブルグ王笏

第十七世紀の末、ドイツのプロイセンの天文家ゴドフリード・キルヒは、其の國王のために“ブランデンブルグ王笏”といふ新星座を、“エリダン河”と“兎”との間に作つた。之れが、しかし危ふく學界から忘れられんとしたので、第十八世紀の末、ボーデは再び此の星座を星圖に發表して、抹殺を防いだ。位置は、今のエリダン座の53番星と54番星とを南北につなぐ線を、ヌ星あたりまで、北方へ延ばしたもので、割り合ひに見易い星座である。尤も星は4等星が2ヶ、他は皆5~6等級の、微光のものばかりであるから、月の明るい夜には見えない。冬の夜の見ものである。(天界94號口繪を見られよ。)

### Solarium 日時計

この星座は、初冬の夕暮れの南天に見えるエリダン河の南にあつて、其の位置は水蛇座と旗魚座との中間の淋しい天空を占めてゐる。作者は知られてゐないが、第十九世紀の中頃のブリト Burritt の書物には記されてある。(つゞく)

## 星 涼 し

北斗冴え北斗冴えくる澄むちゝる	か ず を
猿星も落葉の音を感じてゐる	青 史
星ひかり大根の地熱感じるる	嶺 子
月ありて流星細し秋の風	秋 甫
秋のオリオン蕃人踊もしまひなる	佳 山
星涼し牛車のきしりはろかより	芳 仲
獨學を擔ひ北斗の窓邊にゐる	宗 男
星屑とび軍犬の瞳のあをき光	郷 盛